

英文法拾遺 X

伊 藤 清

(11) 副詞の修飾

(A) 副詞と名詞

A. 文法書には副詞は動詞、形容詞及び副詞を修飾すると述べている。

1 He managed to do it, but he was so exhausted by it that when I told him it was raining he couldn't believe it, but rushed out into the street without his hat or umbrella, the consequence of which was his hair got seriously damp, and one curl didn't recover its right shape for *nearly two days*. —Lewis Carroll: *The Book of Nonsense* (彼は何とかそれをやったが、疲れ果てていたので私が雨が降っていると言った時信じることができず、帽子も傘もなしで飛び出して行き、その結果髪はひどく濡れてカール1つは殆んど2日間ちゃんとした形に戻らなかった。)

2 He was standing outside examining an iron gate he'd sweated on for *nearly a week*. —Alan Sillitoe: *Love and Death* (彼は外に立って、殆んど1週間一生懸命に作った鉄の門を調べていた。)

3 In sheer malignity, thinking to set back our plans and avenge himself for his ignominious expulsion, this traitor has crept here under cover of night and destroyed our work of *nearly a year*. —George Orwell: *Animal Farm* (全くの悪意で我々の計画を覆えし、不名誉な放逐に仕返しをしようと考えて、この裏切者は夜陰に乗じてここに忍び込み殆んど1年かかった我々の仕事を破壊したのだ。)

4 A taxi swerved with screaming brakes and avoided him by *perhaps an inch*. —Jan Struther: *Mrs. Miniver* (1台のタクシーがブレーキを軋ませて逸れ1インチほどでその子を選けた。)

例2以下に於ける副詞 *nearly* と *perhaps* が修飾するものは *for*, *of* 及び *by* の目的語である名詞 *week*, *year*, *inch* に思える。しかし *a nearly week* の如き形を取らないことを考えれば純粹に形容詞として *week* 等の名詞のみを修飾しているとは考え難い。また例1の *nearly two days* から考えれば *one* に比べて弱いとは言え、*two* に対応する位置にあるものは、1つの纏まりを意味する *a, an* である。この1つの纏まりに対しての度合が *nearly* であり *perhaps* である。ただ *two* が *days* を省いて *nearly two* と独立して使用しうのに対し、冠詞は *nearly a*, *perhaps an* 等の形では独立できず、次に名詞を必要とする。更に *one* の意味が軽くなり *a, an* となると副詞が全体にかかる気持が強くなり、修飾の対象は冠詞を含めた句全体となる。それでも尚副詞と冠詞との関係は副詞と名詞との関係よりも強い。次の例

5 It was *nearly a century* later, in 43 A.D., long after Caesar's death, that a Roman army invaded Britain and annexed most of the island to their Empire. —Michael C. Mobbs : *The Language of the British Isles* (ローマの軍勢がブリテンに侵寇しこの島の大部分を彼等の帝国に併合したのは殆んど1世紀後の、シーザーの死のずっと後の紀元43年であった。)

に於ても *nearly* は *a century* を説明すると言えるが、更に分析すれば *a* にかかる度合は *century* にかかる度合よりも強い。また *a century* は副詞的に形容詞 *later* を修飾している。もしくは *nearly* は *a century later* なる形容詞句を修飾しているとも考えることもできる。

6 It is *merely a name* for a collection of men. —S. E. Frost Jr. : *The Nature of the Universe* (人類とは人間の集合に対する単なる1つの名前である。)

7 *Only a quiver* of his eyelids showed that he heard. —Katherine Mansfield : *The Garden Party and Other Stories* (目蓋の震えだけが彼が聞いていることを示していた。)

8 He had dreamed and dreamed of something different until it had become *almost an obsession*. —Theodore Dreiser : *Free* (彼は何か異なったものを絶え

ず夢み続けてきたのだ。そしてそれは殆んど1つの強迫観念とさえなってしまうていた。)

ここに引用したこれら副詞の次に来ている不定冠詞も先に引用したものと同様1つの纏まりを意味する。a mere name (名前にすぎない) と異なり, *merely* は a name を, 特に a を修飾する。only の場合も同様であって an only quiver (ただ1つの震え) と違って完全に名詞のみを修飾しているわけではない。

9 Of all the women whom I have ever known, she, the outwardly calm, the ever-placid Ligeia, was *the most violently a prey* to the tumultuous vultures of stern passion. —Edgar Allan Poe : *Ligeia* (私が知っているあらゆる女性の中で彼女は、外面は落ち付いた、常に静かなリジニアは、激しい情熱を持った騒々しい禿鷹の最も恰好な襲いかかる相手であった。)

この副詞に付けられた *the* は強意を目的としたものであり、副詞を強めた I like it *the* best の類である。

B. 10 In *almost all societies* there are rituals connected with the giving and receiving of gifts and there are occasions on which gift giving becomes for all practical purposes obligatory. —Ina C. Brown : *Understanding Other Cultures* (殆んどあらゆる社会に於て贈物のやりとりに関する社会的慣例があり、また実際面ではどうしてもしなければならない場合がある。)

11 *Almost every country* in the world has at least one hero. —Donald Keene : *Heroes, Old and New*

12 By the autumn *almost every animal* on the farm was literate in some degree. —Orwell : *Animal Farm* (秋までに農園の殆んどすべての動物はある程度読み書きができるようになった。)

これらの場合 *almost* が修飾するものは次に来る形容詞 *all* や *every* であって *societies* や *country*, *animal* ではない。最初の例が *almost all of the societies* となっても *all* は本来形容詞ゆえこれを副詞が修飾することに何の違和感も生じない。次のように形容詞がそれが修飾する語である名詞と合して1語

となった場合はどうであろうか。

13 Nobody shirked—or *almost nobody*. —Orwell: *ibid.* (誰もずるけなかった——いや殆んど誰も。)

14 With open-ended questions and follow-up questions you can begin a conversation with *almost anyone*. —Ronald D. Gordon: *Communicating with the West* (自由解答が可能な開放的の質問と追跡質問とを使えば殆んど誰とでも会話を始めることができる。)

15 Stage Manager: *Almost everybody* in the world gets married. —Thornton Wilder: *Our Town*

例えば a heavy drinker の heavy は形の上では drinker を修飾しているが意味は「体重の重い」ではない。one who drinks heavily の意味であって heavy は意味上 drink を部分的に修飾 (partial modification) している。副詞が関係する例としては I am *quite a stranger* here などがこれに当り I am *quite strange* here から分るように *quite* に対して一番比重の重い語は *stranger* 中の *strange* である。

nobody, anyone, everybody も drinker, *stranger* の場合と同様 *almost* は形式上これらを修飾しているが実質的对象はあくまで *no, any, every* であって *almost body* という表現はない。

C. 16 ‘No, indeed I haven’t,’ I said, ‘and it wasn’t *exactly the hair*.’ —Carroll: *The Book of Nonsense* (「いや、本当に違うんだ。それは本当に髪の毛じゃないんだよ。」)

17 But *even the band* seemed to know what she was feeling and played more softly, played tenderly, and the drum beat “The Brute! the Brute!” over and over. —Mansfield: *The Garden Party* (しかしバンドでさえも彼女の気持を知っているようで、前よりも穏やかに演奏し、やさしく演奏し、ドラムは「ひどい人、ひどい人」と鳴り響いた。)

18 I hated the drivers for pretending they didn't see me, *especially the ones* in big cars with three empty seats. —Roald Dahl: *More Tales of the Unexpected* (私は私を見ていないふりをする運転手達、特に3つの空席がある大きな車の運転手達が嫌いだった。)

名詞に定冠詞が付いた場合、夫々の副詞は *a week* の場合と同様 *the hair*, *the band*, *the ones* 全体を修飾するが、定冠詞の持つ特定の意味「その」の為に、名詞に対するよりも強い関係を持つ。例17では *the band even* とも言うが、その場合は近接の法則 (the rule of proximity) により *band* にかかる気持は *the* にかかる気持よりも強くなるであろう。このことは *only* を用いた場合についても当てはまる。即ち *only a book* と *a book only* とでは前者は *a* に、後者では *book* にかかる気持が強い。しかし *the band even* の場合でも *band even* という言い方はしない所から考えても *the* は必要であり *even* は *the* をも修飾することは明らかである。

D. 19 We loved him, and we loved his monkeys to *exactly the same degree* and in *exactly the same way*; Jean Stafford: *In the Zoo* (我々は彼を愛し、また彼の猿を全く同じ程度にまた全く同じように愛した。)

20 The area of the forty-eight adjoining states is more than twenty times that of Japan, which is *almost exactly the same size* as the third largest of the forty-eight, Montana. —Edward Seidensticker: *America to Me* (相接する48州の面積は日本の面積の20倍以上であり、日本の面積は48州中の3番目に大きいモンタナ州と殆んど全く同じ広さである。)

名詞に形容詞が付いた場合。日常生活の中で実際に喋っている時は副詞の後に来る句、節をひと纏めにして副詞が修飾しているという気持が働いているであろうし、副詞が名詞を修飾しているという漠然とした感じを抱いているであろう。しかし上に引用した例に於ては意味から言って *exactly* が *the same* に対して関わる度合は極めて強く、*degree*, *way*, *size* に対しては極めて弱い。また *the same* の *the* は *same* ゆえ自動的に付いたものであり、例16, 17 の *the hair* や *the band* の *the* の持つ重みはなく、*exactly* の実際に修飾す

るものは *same* の方である。修飾には位置関係以外に意味の強さが関係する。

例20では *almost* は *exactly* を修飾する。

以下の最初の例の *the same* は形容詞に定冠詞を付して具体化したものであるが、夫々の副詞によって修飾されている。

21 They all looked forward to Sundays because then, although they had *exactly the same*, everyone was allowed a second help. —Dahl: *Charlie and the Chocolate Factory* (彼等は皆日曜日を楽しみにしていました。なぜならその時には全く同じものを食べるのだけれど、みんなお代りを許されていたからです。)

22 The other man lay in bed, looking *much the same* as ever, but mournful in aspect, though pleased within himself at being coddled. —D. H. Lawrence: *The Old Adam* (もう1人の男は相変らず殆んど同じようにベッドに横になっていた。しかし、大事に扱われて心の中では悦んでいたが、表情は悲しみに沈んでいた。)

23 While both *pretty* and *handsome* mean *much the same thing*, they are not normally interchangeable, for part of their associative meaning is derived from the collocational company they keep. —Dick Leith: *A Social History of English* (*pretty* と *handsome* の2つはおよそ同じ事を意味するのであるが、それらは普通は相互に交換できるものではない。というのはそれらの連想させる意味の1部はどんな言葉と組合せるかということから生じるからである。)

24 We saw above that *woman* and *lady* have *roughly the same conceptual meaning*, but a moment's reflection will remind us that we use the two words very differently. —Leith: *ibid.* (私達は上述によって *woman* と *lady* とは大雑把に同じ概念上の意味を持っていることを理解したが、少し考えてみると私達はこの2つの単語を非常に違ったように使用していることを思い出すのである。)

次例中の *the opposite* についても *the same* の場合と同様副詞は *the* 以上に *opposite* を修飾する度合いが強い。

25 But in contemporary American English, the meaning is *exactly the opposite*. —James Kirkup: *English with a Smile*

26 My own theory, of course, was *precisely the opposite*, that the inward attitude comes first; the spirit determines the outward expression and the ultimate form; that really significant and lasting changes of behavior must start from within. —Elizabeth Vining: *Windows for the Crown Prince* (私自身の理論は勿論正確にその反対のもので、内的態度が最初に生じ、その精神が外的表情と最終的形式を決定し、行動の真に意義ある永続的変化は内から発しなければならぬというものであった。)

次の例

27 “Evie’s *absolutely the last woman* I’d have suspected of kicking over the traces.” —Somerset Maugham: *The Colonel’s Lady* (エヴィは私に背くことなど私が仮初にも思うような女性ではなかった。)

に於ても *absolutely* は *the last woman* 全体を修飾するが、より正確には *the same degree* 等の場合の *same* と同じように *last* を主として修飾する。即ち副詞が句を修飾していても形容詞があれば主としてそれを修飾すると言うことができる。

E. 28 It was *nearly time* now. —Dahl: *More Tales of the Unexpected*

29 It was *nearly time* for the daily train from the north. —Paul Bowles: *The Delicate Prey* (北からの毎日の列車がそろそろ着く頃だった。)

30 Pegeen: Well, you’ll have peace in this place, Christy Mahon, and none to trouble you, and it’s *near time* a fine lad like you should have your good share of the earth. —John M. Synge: *The Playboy of the Western World* (ねえ、ここだったら静かに暮せるわ。クリスティ・マホーン。あなたを煩わせる人はいないし、それにあなたのような素敵な若者がこの世の楽しみを持ってもいい頃だわ。)

名詞が無冠詞の場合。一般的に言って補語として用いられる語はたとえ名詞であっても、主語もしくは目的語についての説明であるが故に多分に形容詞の

性質^①を帯びており、補語としての名詞に対して使用された副詞はこの性質を修飾している。例30の *near* は前置詞である。

31 *Almost paradise.*

We're knocking on heaven's door. —Mike Lenno & Ann Wilson : *Almost Paradise*

この場合も *It is almost paradise* と *paradise* は補語として多分に形容詞的性質を帯びその性質を副詞が修飾している。ただ文法ではそういった感じや言語の機能までを規則として説明することがない為に形の上から副詞が名詞を修飾すると品詞を中心に説明するに留まっている。しかし言語作用には品詞を超越した、文法では割り切れないものが常に作用している。*only* などが文中の方々に出没するのもその表れであろう。

32 The English of this level is the English of ordinary conversation, which is *mostly monologue*, as you'll soon realize if you do a bit of eavesdropping, or listening yourself. —Northrop Frye : *The Educated Imagination* (この水準で用いられる英語は日常会話の英語であるが、それは相手に気付かれないでそっと聞か、自分が喋っているのを客観的に聞けばすぐ分るように大抵は独白である。)

33 Is it possible that literature, *especially poetry*, is something that a scientific civilization like ours will eventually outgrow? —Frye : *ibid.* (文学、特に詩は、

- (1) 名詞が形容詞の性質を帯びることについては例えば同格の名詞がそうである。同格の名詞はすべて説明的であり、同格であるからと言って、それが説明する名詞の代りができるとは限らない。次の2例の同格語を主語とした文は共に誤りである。

I, *your master*, command you.

Mr. A, *mayor of Kobe*, comes today.

また名詞が形容詞的性質を有する為に無冠詞で使用される場合は多い。

She did not think him *man* enough. —John Galsworthy : *The Dark Flower*
その他 *leader* enough, *egoist* enough, *ass* enough, *fool* enough など enough によっても分る通り名詞は分量、度合、素質等多分に形容詞的性質を有する。次の場合も殆んど形容詞的素質を表わしている。

Before he was twenty, Pecos Bill was *top man* of the cattle country. —Louis Untermeyer : *The Wonderful Adventures of Paul Bunyan* (20才前にビロコス・ビルは牧畜地帯の第1人者であった。)

現代のような科学文明が終局的に不要とするようなものとなるということはあることであろうか。)

mostly monologue の *monologue* も *is* の補語であり、この形容詞的要素を副詞が修飾していると考えられる。尚例2, 例4の *for nearly a week*, *by perhaps an inch* などは前置詞の目的語としての名詞であり形容詞的要素はない。これに対して例6の *It is merely a name* の *a name* は補語として形容詞的働きを有する。例33の *especially poetry* の場合は文章としての形が省略されると *poetry* にかかる気持が強くなってくるが、文章中に使用された普通の副詞であり、*is* を修飾すると考えられる。その他次の如きものも形は所謂名詞修飾の副詞と似ているが、孰れも文修飾の副詞である。

34 This ladies' "smoking boom" has come about only in the last decade or so, *ironically* the same period in which smoking has been positively linked to cancer and heart disease. —Jim Knudsen: *The Next Stage* (女性のこの「喫煙ブーム」はほんのここ10年かそこらに起った。それは皮肉にも喫煙が癌や心臓病にはつきり関連づけられたのと同じ時期である。)

35 He was *normally* a sharp young man, quick at his work, making a lot of jokes, good company. —Doris Lessing: *A Woman on a Roof* (彼は普通では頭の切れる若者で、仕事が早く、よく冗談を言い、一緒にいていい連れであった。)

36 There is loveliness in the complicated strokes of Kanji, *especially* when made with brush and ink. —Peter Milward: *From English into Japanese* (漢字の複雑な筆致の中に美しいものがある、特に筆と墨とで書かれる時には。)

37 Hundreds, yes, *literally* hundreds, had come out in a single night. —Mansfield: *The Garden Party* (幾百もの、そう、文字通り幾百もの花がたった一夜で咲いていた。)

38 There was an answering croak from a little distance in the wood—*evidently* a croak of inquiry. —Mark Twain: *Baker's Bluejoy Yarn* (森の少し離れた所から鳥の応ずる啼声が聞えてきた——明らかに問い合せの啼声だった。)

例34は *which is ironically...* の意味であり、例35の *normally* は文頭でも *a sharp young man* の後にでも置くことができる。例38は *hundreds* 自体に形容詞的要素がある為に *literally* となったもので、この名詞化された語に対しては正しくは *literal hundreds* であろう。そうならないのは *they are literally hundreds* と文副詞的に使われているからであり、この *literally* が *hundreds* を修飾することには違和感がある。

F. 39 “All we’ve got to do now is find out *exactly how old you are!*” —Dahl: *Charlie and the Great Glass Elevator*

40 “I feel almost *exactly how I felt* when I was fifty years old.” —Dahl: *ibid.*

名詞節 *how old you are*, *how I felt* は1つの思考単位ではあるが最初の例で *exactly* が関係するのは *how old*, 特に *how*, 後の例でも *how* であり、共に副詞である。

41 At the time he had married Ernestine he was really too young to know *exactly what it was* he wanted to do or *how it was* he was going to feel in the years to come; and yet there was no one to guide him, to stop him. —Dreiser: *Free* (アーネスティンと結婚した時彼は実際若すぎて自分がしたいことは正確には何であるか、あるいは年月が経つうちに正確にはどんな風を感じるようになるものかも分らなかった。しかも指導してくれる人も、思いとどまらせてくれる人もいなかった。)

上例の *exactly* は疑問代名詞 *what* の、この場合の補語的要素を、また副詞 *how* の持つ副詞的要素を修飾する。

以上引用した例は表面的には副詞の後に名詞(句、節)が来ており、副詞は動詞、形容詞、副詞以外に名詞を修飾することがあると付け加えても良いように思われる。また一般的には便宜上、副詞は名詞を修飾すると言うことがある。しかし上に扱った副詞は純然たる形容詞の如く名詞の直前に来ているので

はない。冠詞があれば更に冠詞の前に位置する。名詞を修飾する形を取っていても実際には冠詞をも含めた語群である。更に言えば冠詞や形容詞・副詞の有無、語群の各語の意味内容、副詞との位置関係等によって副詞は語群中の1語を他の語よりも更に強く修飾する。そしてその1語は結局は冠詞を初めとする形容詞、副詞及びそれらに相当する語である。形の上ではともかく内容的には副詞が動詞、形容詞、副詞を修飾するという定義を逸脱しているわけではない。外形のみを見て副詞は名詞を修飾すると断定するのは誤りであろう。

次に修飾する副詞自体について付け加えれば、用いられている副詞は大体特質、度合、分量などを表わす性質のものに限られている。*nearly a week* (例2), *perhaps an inch* (4) を初めとし, *only a quiver* (7), *almost every country* (11), *much the same thing* (23) も度合、分量を, *absolutely the last woman* (27) も特質を, *almost paradise* (30) もまた度合を表わしている。更に *exactly how old you are* (39) の中に度合があり, *exactly how I felt* (40) は感じ方の度合である。その他引用文中に用いられた *nearly*, *merely*, *precisely* などすべて度合、特質に関する副詞である。このことから言えば the all people でなく *all the people* に於る形容詞 *all* には度合副詞的な気持があると言える。

(B) 副詞と前置詞・接続詞

42 But a few days after, when the question of investing the money arose, he remarked that she did not seem so satisfied as he had hoped. —Thomas Hardy: *To Please His Wife* (2, 3日後その金を投資するという問題が起った時、彼は妻に自分が思っていた程満足していないようだと言った。)

43 an unalterable law by which all the animals on Animal Farm must live for ever after —Orwell: *Animal Farm* (ずっとその後動物農園のあらゆる動物達が手がかりとして生きて行かねばならない不変の法)

44 A year after the close of the war, on my way to California, I opened and idly inspected it. —Ambrose Bierce: *In the Midst of Life* (戦争が終って1年後、カリフォルニアに行く途中、私はその紙入れを開けて何となくそれを調べた。)

45 Ferdy asked me for my address and *a few days after* I got back to London invited me to dinner. —Maugham : *The Alien Corn* (ファーディは私に私の番地を教えてくださいと言い、私がロンドンに帰って2, 3日後に私を夕食に招待した。)

例42, 43の *after* は副詞で、それがどの位 *after* であるかということを *a few days* や *for ever* が説明している。*after* の後に更に語句や節が続けば副詞は前置詞あるいは接続詞に変る。即ち品詞に変化が生じるか否かは副詞の後が拡充するか否かの問題である。例44では *after* は前置詞、例45では接続詞となる。しかし品詞が変化しても何の *after* であるかということに就いては何ら変りはない。従って前置詞であれ接続詞であれ、これを *a year, a few days* が修飾すると考えても差支えないように思われる。ただ従来の文法の枠内で説明するとすればこれらの場合は *after* の導く副詞句、副詞節を修飾することになるであろうが、必ずしも従来の規則のみを正しいとする考え方に捉われる必要はないであろう。*before* に就いても同じように考えることが出来る。

46 That was *forty-eight years before*. —Dreiser : *Lost Phoebe*

47 and they were married in London *a week before* the beginning of the autumn term —James Hilton : *Good-bye, Mr Chips*

48 *Almost before* Major had reached the end, they had begun singing it for themselves. —Orwell : *Animal Farm* (豚のメイジャが歌い終るか終らないうちに動物達は自分で歌い始めていた。)

after であれ *before* であれ接続詞として使用されるものは従属接続詞のみであり、副詞として機能しない等位接続詞 *and, or* などを副詞が修飾することはない。

49 In spite of the local differences and difficulties, I believe that the problems of English style are similar *the whole world over*. —Alan Warner : *A Short Guide to English Style* (地方的差異や困難にも拘らず、私は英語の文体の問題は世

界中似たものであると信じている。)

50 Dead fifteen years and still he is famous, *all over the world*. —Irwin Shaw : *The Lament of Madam Rechevsky* (死んで15年になるのにまだ彼は世界中で有名です。)

51 There were scorpions in the cave *all year round*, but above all during the days just before the plants began to let water drip through. —Paul Bowles : *The Delicate Prey and Other Stories* (洞窟には1年中蝎がいた、しかしとりわけ植物が水を滴らせ始める直前の何日間かには。)

52 Lucia : And she used to sing the Christmas hymns *all around the year*. —Thornton Wilder : *The Long Christmas Dinner* (「そして彼女は年がら年中クリスマス賛美歌を歌っていたわ。」)

例49では *the whole world* 迄では文は意味をなさずそれが修飾する *over* を必要とする。例50では *the world* を付けた為 *over* が前置詞となったものであり、*all* は *over* もしくは *over the world* と修飾するが、感じの上から言えば前者を修飾している。例51, 52の *round*, *around* に就いても前の2例と同様に考えることができる。その他 *all the way through; many, many years since; a year and a half away* など例は多い。次の2例

53 No, this was now the time-honoured protest against *a world away*. —Pearl Buck : *The First Wife and Other Stories* (いや、今用いる方法が意にかなわない世界に対する昔から用いられて来た抗議である。)

54 She had given him the silk *two days ago*. —Buck : *ibid*.

に於て例53では *a world* が中心であり、副詞 *away* は形容詞として前者を修飾する。また例54では *ago* は形容詞⁽²⁾で所謂独立分詞構文 *two days being*

(2) *Longman Dictionary of Contemporary English* の new edition では *ago* を形容詞とのみ記し副詞は認めていない。序ながら同書では Sunday を *the first day* ではなく *the last day of the week* と定義しているのは *sabbath day* の意味から考えて正しい定義であろう。

agone に由来し *two days* を修飾する。

その他副詞としての機能を持つ語が前置詞として使用されている例を挙げれば

55 I frightened her *almost to death*. —Ellen Glasgow: *Women in the South*
(彼女を死ぬ程驚ろかした。)

56 it was one of those big houses *just off* Fifth Avenue —Glasgow: *ibid.*
(それは5番街はずれの大きな家の1つだった。)

57 They went *right past* the door at which we were standing and into the parlor. —Tennessee Williams: *Portrait of a Girl in Glass* (姉の足音は私達が立っているドアをすっと通りすぎ居間の方へ行った。)

58 America is not *completely without* customs that show consciousness of social distinction. —G. Doty: *Life in the USA* (アメリカには社会的区別の意識を示す習慣が全然ないわけではない。)

59 I was *almost in* the room with her when she dyed it. —J. D. Salinger: *Uncle Wiggily in Connecticut* (私は彼女が髪を染めている時彼女と殆んど部屋にいたわ。)

例55の *to death* は副詞句、56の前置詞 *off* 以下は形容詞句となる。例57では *right past the door* の *right* は前置詞 *past* もしくは副詞句 *past the door* を修飾し、この句は *went* にかかる。例59では「部屋に入りかけた」ではないため *in* にかかるのではなく *in the room* 全体を修飾すると考えられる。

60 arriving *exactly at twelve-twenty* as I had been told to do —Vining: *Windows for the Crown Prince*

61 At *precisely half-past two* the long black Imperial House-hold Packard came slowly. —Vining: *Crown Prince*

at は *from*, *of*, *with* などと共に前置詞としての機能しか有していないが、前置詞と雖も意味を有しており、それを直前に来る副詞が修飾限定すると考えてもおかしくはない。*the rule of proximity* から考えてもこれら副詞が最も深く関係するのはその次に来る前置詞であり、副詞的小辞 (*adverbial particle*) と前置詞とが合体した前置詞 *into*, *onto*, *until*, *upon* などが生じたのもその密接な関係のゆえであろう。*exactly at* の *at* は 1 点を指し、その 1 点を *exactly* が強調していると考えerことは可能である。ただこの場合 *at twelve—twenty* なる時の 1 点を強調していると考えの方がより正しいであろう。例 61 の *precisely* は前置詞 *half-past* (*half* は副詞として前置詞〔過去分詞〕*past* を修飾) を説明し、*two* は *half-past* の目的語である。

上記の *the rule of proximity* は次に引用する副詞と接続詞でも明瞭に認められる。

62 Confucious has been worshipped for many centuries *almost as if* he were a god. —Donald Keene: *Heroes, Old and New* (孔子は幾世紀もの間殆んどまるで神のように崇拜されてきた。)

63 It was *exactly as though* the earth had opened and he had seen the boy lying there with Woodfield's girls staring down at him. —Mansfield: *The Garden Party* (それは将に大地が裂けて息子がそこに横たわり、それをウッドフィールドの娘達が見おろしているのを見ているようであった。)

almost と *exactly* との修飾するものは接続詞 *as* のみである。

64 The greatest writers—Homer, Dante, Shakespeare—are effective *largely because* they deal in particulars and report the details that matter. —William Strunk: *The Elements of Style* (最も偉大な作家達——ホーマー、ダンテ、シェクスピア——は彼等が特殊な事柄を取り扱い、関係する詳細な事柄を述べているので効果的である。)

chiefly because などよく使用されるが、これら副詞と接続詞との関係は発音の点から考えても副詞と接続詞を含めたそれ以下の節との関係よりも強い

とすることができる。しかし先に述べたように従来の文法に則って言えば接続詞以下の副詞節を修飾するということになるであろう。尚 *as* や *because* は副詞の働きも有している。

副詞が前置詞でも接続詞でも修飾できるとなれば初級の文法に混乱を生じかねない。従来の文法範疇からの逸脱を避けようとするれば、前置詞、接続詞として機能する語が、副詞としての機能を有すると否とに拘らずそれらが導く句或るいは節を副詞が修飾すると言うしかないであろう。ただ文法は極く大雑把な大体の *guideline* であるにすぎず言語の機能を有機的に幅広く解釈することは可能でありまた望ましいと考える。

——文学部教授——